

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Adverse pregnancy outcomes of cancer survivors and infectious disease in their infants: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

AYA 世代がんサバイバーの妊娠帰結と出生児の感染症

ユニットセンター(UC)等名:愛知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Oncology Letters

年:2023

DOI:10.3892/ol.2023.13686

筆頭著者名: 西川 隆太郎

所属 UC 名:愛知ユニットセンター

目的:

AYA 世代のがんサバイバーの妊娠、出生児の帰結に関する出生コホート研究は限られている。本研究では AYA がんサバイバーの妊娠帰結、出生児の 1 歳時までの感染症について調べた。

方法:

エコチル調査のデータを用いて、がんの既往歴の有無による早産、妊娠高血圧症候群、低出生体重、出生児の 1 歳時までの感染症との関係を調べた。

結果:

エコチル調査に参加した母親 99,816 名のうち 1,102 名 (1.1%)にがんの既往歴があった。812 名(0.8%)は子宮頸がんであった。子宮頸がん既往者は 34 週未満の早産(オッズ比 3.25, 95% CI, 2.31-4.57; $q=0.00$)、37 週未満の早産(オッズ比 2.82, 95% CI, 2.31-3.44; $q=0.00$)、前期破水(オッズ比 1.67, 95% CI, 1.36-2.06; $q=0.00$)が有意に多く、その他のがんでは帝王切開(オッズ比 1.43, 95% CI, 1.10-1.87; $q=0.00$)が多かった。経膈分娩による子宮頸がん既往者の出生児は 1 歳時までの下部呼吸器感染症(オッズ比 1.77, 95% CI, 1.33-2.36; $q=0.00$)が多いことが、今回初めて明らかになった。帝王切開率はすべてのがんで上昇した。先天異常や他の感染症は上昇しなかった。

考察(研究の限界を含める):

子宮頸がんでは早産、前期破水の頻度が高まり、経膈分娩による子宮頸がん既往者では出生児の呼吸器感染症の頻度が上昇することに注意が必要と考えられる。この研究では子宮頸がんにも異形成が含まれている可能性もあるが、質問票で区別していないため、研究の限界と思われる。ヒトパピローマウイルス(HPV)陽性妊婦と同様の感染症の増加が報告されているため、子宮頸がんの既往が原因か、HPV が原因かは不明である。子宮頸がんでも帝王切開であれば出生児の下部呼吸器疾患の頻度は変わらなかったが、母体の帝王切開の侵襲を考えたときに子宮頸がん既往者は帝王切開にすべきといえるものではない。

結論:

子宮頸がん既往妊娠では早産、前期破水の頻度が高まり、また子宮頸がん既往妊娠による経膈分娩では出生児の呼吸器感染症の頻度が上昇することが明らかになった。すべてのがんサバイバーで帝王切開率が上昇したが、先天異常や他の感染症の上昇はみられなかった。